

令和元年度 いわき総合図書館 企画展

西山宗因「奥州紀行」展



『談林六世像賛』より西山宗因肖像部分
八代市立博物 未来の森ミュージアム提供

世を尽くす
我が所貸せ
下紅葉

西山宗因

いわき市立いわき総合図書

いわき市平字田町 120 ラトブ 4・5

TEL 0246-22-5552

<http://library.city.iwaki.fukushima.jp>

西山宗因「奥州紀行」展の開催にあたって

談林派俳諧の祖といわれる西山宗因 1605 1682年 は、江戸時代初めの寛文 1662 年、いわきの地を訪れ、その時のことなどを「奥州紀行」に書き留めました。

寛文3年7月20日過ぎ、宗因はいわきに入り、翌月の 月16日 まで滞在し、その後、相 中村など、福島県の浜通りを旅して、松島に向かいました。また、松島からの帰りには福島、二本松、三春を経て、再び、いわきに入り、数日間を過ごし、8月の末に、いわきを れ、白河を経て、江戸に戻りました。

この間、いわきの地で、宗因は、

世を尽くす 我が所貸せ 下紅葉

千々の秋 よしや別れは 命哉

晨明の つれなやたった 一人旅

などの名句を詠みました。

宗因は、当時の磐城平藩主、内藤忠興、そして、その子の義概 虎 の招きで、いわきの地を訪れたものと思われます。磐城平藩主の内藤家は江戸やいわきの地などでの俳諧の 盛、さらには元禄文化の発展に大きな貢献をしました。

当時のいわきの様子などに思いを せながら、宗因の『奥州紀行』の世界を味わい、楽しんでいただければ幸いです。

今回の展示会の開催にあたり、学習 大学、八代市立博物 未来の森ミュージアム、いわき市勿来関文学歴史 に多大なる御協力をいただきました。感謝を申し上げます。

令和元年6月

いわき市立いわき総合図書 長 夏井芳徳

西山宗因（1605～1682年）

江戸時代前期の俳人、連歌師。本名は西山豊一。武家の出で、肥後（熊本）藩主、加藤家の家臣、加藤正方に仕えた。宗因は正方の影響で連歌の道に進み、京都にも遊学した。

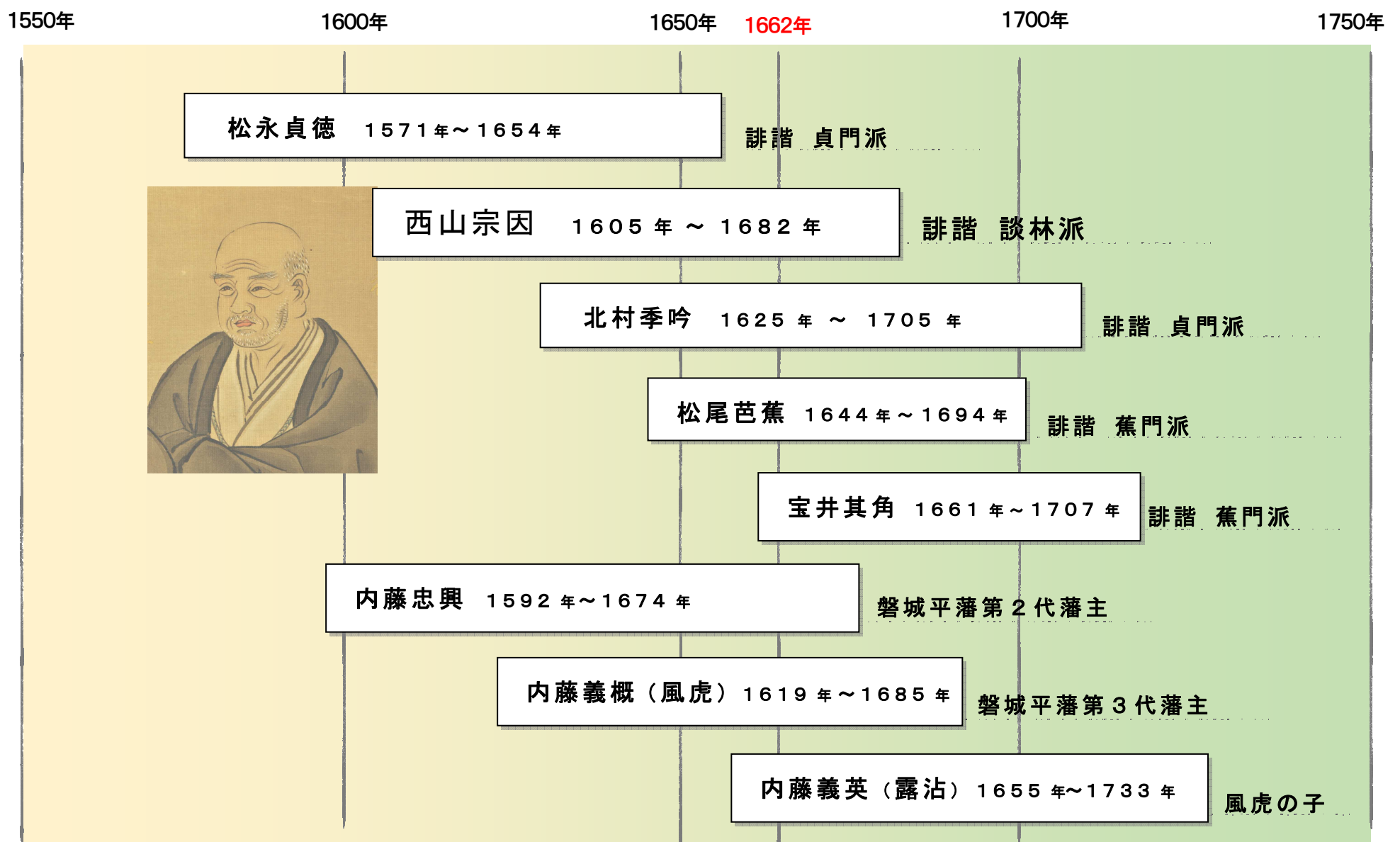
しかし、寛永9（1632）年、肥後（熊本）藩主、加藤家に取り潰しとなり、宗因も浪人の身となる。

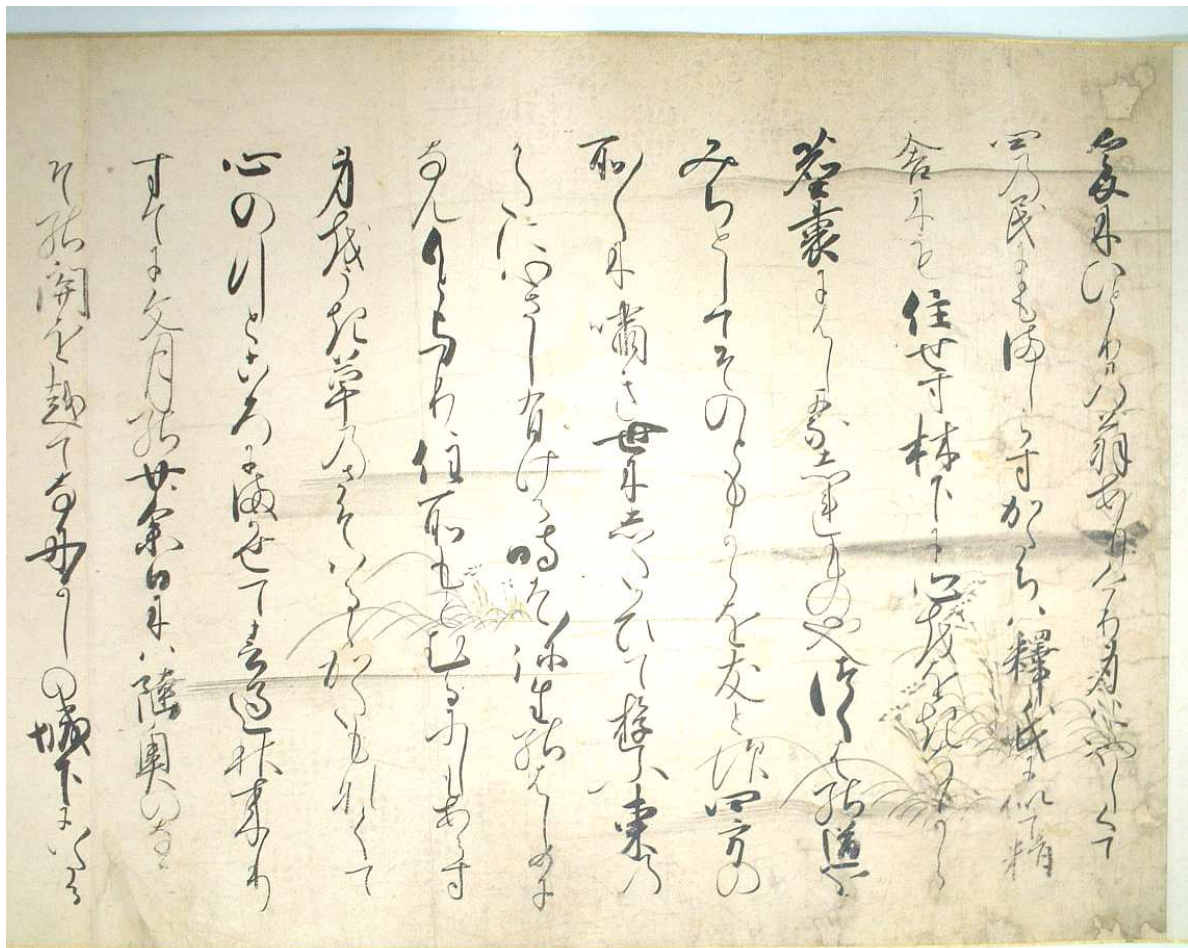
その後、連歌の道を究め、正保4（1647）年には大坂天満宮連歌所の宗匠となった。また、俳諧の道も究め、延宝（1673～1681）年間には談林派俳諧の宗匠となった。

談林派の俳諧は、それ以前の言語遊戯を主とする貞門派の俳諧とは一線を画し、奇抜な着想と軽妙な言葉遣いを特徴とし、俳諧の新しい境地を切り開いた。また、談林派俳諧は松尾芭蕉の蕉門派のもとになったともいわれる。

芭蕉は宗因を「宗因なくんば、我々が俳諧、今以て、貞徳が涎をねぶるべし。宗因はこの道の中興開山なり」（『去来抄』）と述べている。

西山宗因と磐城平藩内藤家の人物年表





『西山宗因奥州紀行巻』 いわき市勿来関文学歴史 提供

読みくだし文

西山宗因 奥州紀行 寛文三 一六六三 年春成立

爰こゝに ひとり一人の翁おきなありけり 身みはいやし卑くて

四しの民たみにもま交じらず かたち形は釈しやく氏しに似にて 精しゆく

舎しにも住じうせず 林りん下かに心こゝろを置きながら

塵じん裏りには走しる痴しれ者もの也 つく筑ば波の道みちを

みち道として そのと輩もがらを友ともとす 四よ方もの

所ところ々に嘯せうき 世よにした徒がひて遊あそぶ 東あづまの

かた方に心こゝろざし有あける時ときは 弥や生よのは初じめに

なん もと元より住すま所ところもと求むるにもあらず

身みを浮う誘き草くさのさ誘そは方るゝかた方もなくて

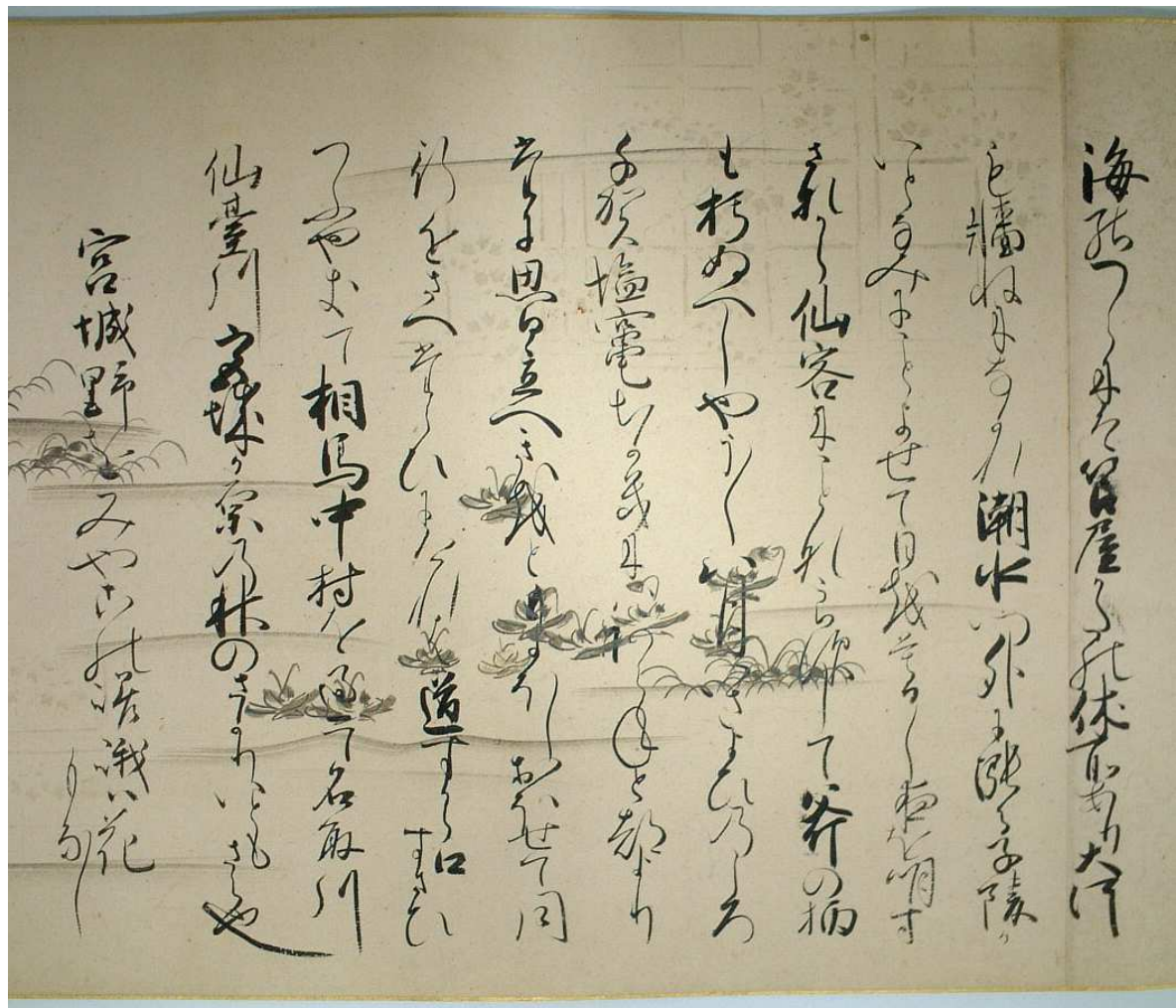
心こゝろの行いくところところにま任かせて 春はる過すぎ 秋あき来きたり

すでに文ぶん月げつの甘あま余あま日ひには 奥おくのな勿こ

その関せきを越こて な何に某がしの城しろ下したに至いたる

此地西北よりめぐりて、名山あり山すく
 よかならずして、茂林々たり、南に川在
 日夜東流して、蒼海にのぞめば、東呉
 万里の船をつなぐ、ゆをびかなる壯觀也
 なこそこの関、さはこの御湯、野田玉川、緒
 絶橋、小川橋、岩城山、この城外一、二里の
 間にあり、をのをの興ある所なり、玉川の
 水上に、城主、優遊の地あり、東籬に
 菊を愛し、南山の紅葉、時を得たり
 茸狩、川逍遥のたより、おかしきし
 つらひなり

此地^{このち} 西北にめぐりて^巡、みな山也^皆、山^健すく
 よかならずして、茂林^{もりんせいせい}々たり、南に川在^{あり}
 日夜 東流して、蒼海にのぞめば^臨、東呉^{とうご}
 万里の船をつなぐ^繫、ゆをびかなる壯觀也^{そうかん}
 なこそこの関^勿、さはこの御湯^三、野田玉川^{のだのたまがわ}、緒^お
 絶橋^{だえのはし}、小川橋^{おがわのはし}、岩城山、この城外一、二里の
 間にあり、をのをの興ある所なり、玉川の
 水上に^{みなかみ}、城主^{みんぬし}、優遊^{ゆうゆう}の地あり、東籬^{とうり}に
 菊を愛し、南山の紅葉^{もみじ}、時を得たり
 茸狩^{きのこがり}、川逍遥^{かわしゅうよう}のたより^便、おかしきし
 つらひなり
 世をつくすわが所かせ下紅葉^{したもみじ}



海はつらには菅屋がたの休所あり大河

と播ぬむらり潮水門外に漲る子が

いとなみにことよせて日を暮し夜を明す

さながら仙客にことならずして斧の柄

も朽ぬべしやうやう八月いざよひのころ

千賀塩竈ちかきにはあらねど都より

だに思ひ立べきをともよほしおほせて同

行をさへたうびにければ道すがら口すさび

つぶやきて相中村を過て名取川

仙臺川宮城が原の秋のさかりいともさら也

宮城野をみやこの嵯峨は花もなし

海のつらには菅屋がたの休所あり大河

も播ぬむらり潮水門外に漲る子が

いとなみにことよせて日を暮し夜を明す

さながら仙客にことならずして斧の柄

も朽ぬべしやうやう八月いざよひのころ

千賀塩竈ちかきにはあらねど都より

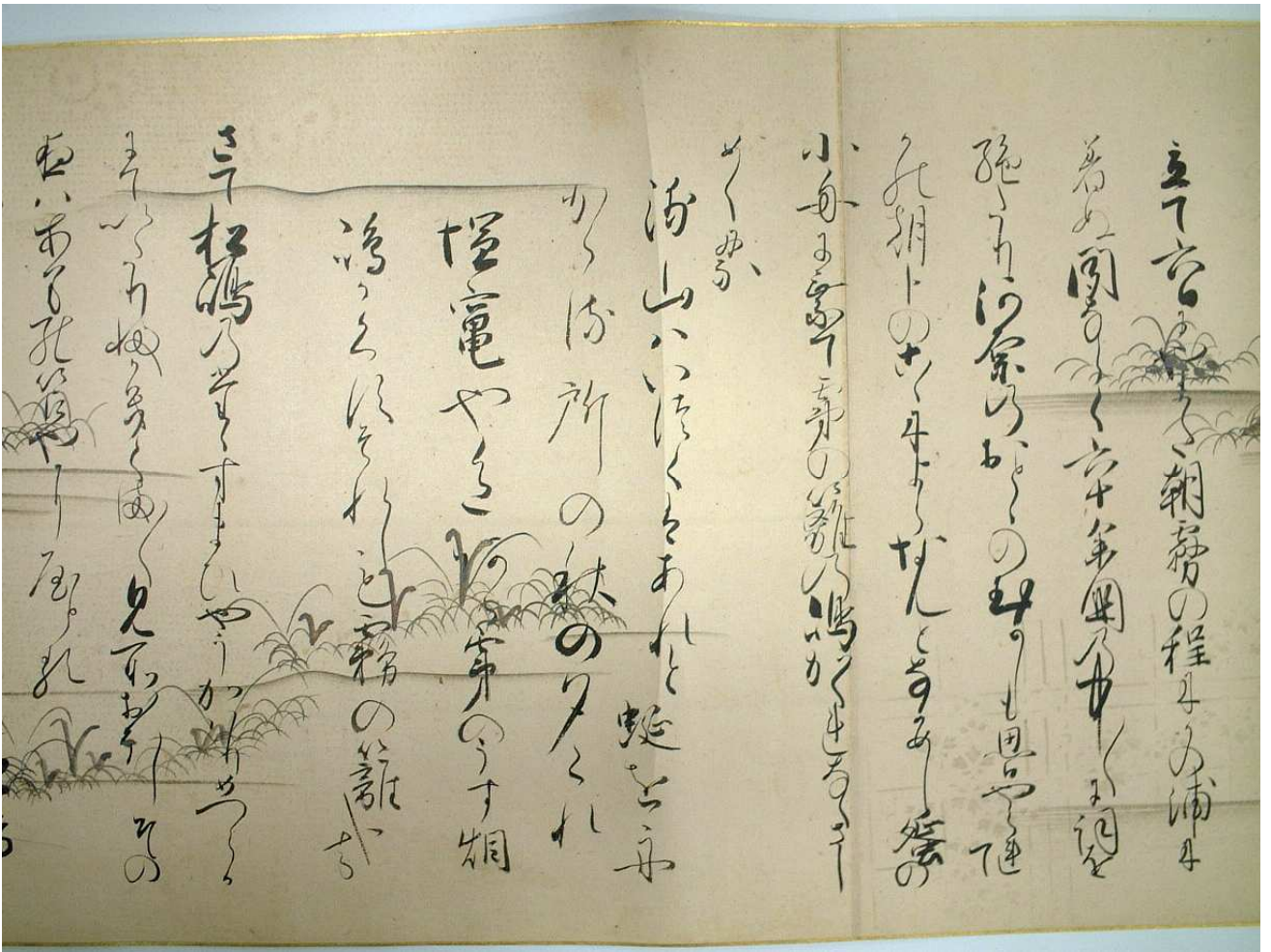
だに思ひ立べきをともよほしおほせて同

行をさへたうびにければ道すがら口すさび

つぶやきて相中村を過て名取川

仙臺川宮城が原の秋のさかりいともさら也

宮城野をみやこの嵯峨は花もなし



立て六日にや まだ朝の程に かの浦に

着ぬ 聞ならく 六十余國の中々に詞を

絶たり 河原のおとど のむかしも思ひやられて

かの朝臣のこゝによらなんとながめしあまの

小舟に乗て 籬の嶋かくれなく さし

めぐる

浦山はいづくはあれど蟹を舟

かゝる所の秋の夕ぐれ

塩竈や色ある のうす烟

嶋かくすそれしも の籬哉

さて 松嶋のたゞすまひ やうかはり めづらか

にいたり ふかきくまぐま見所おほし その

夜はあまの筈やにやどる

立て六日にや まだ朝の程に かの浦に

着ぬ 聞ならく 六十余國の中々に詞を

絶たり 河原のおとど のむかしも思ひやられて

かの朝臣のこゝによらなんとながめしあまの

小舟に乗て 籬の嶋かくれなく さし

めぐる

浦山はいづくはあれど蟹を舟

かゝる所の秋の夕ぐれ

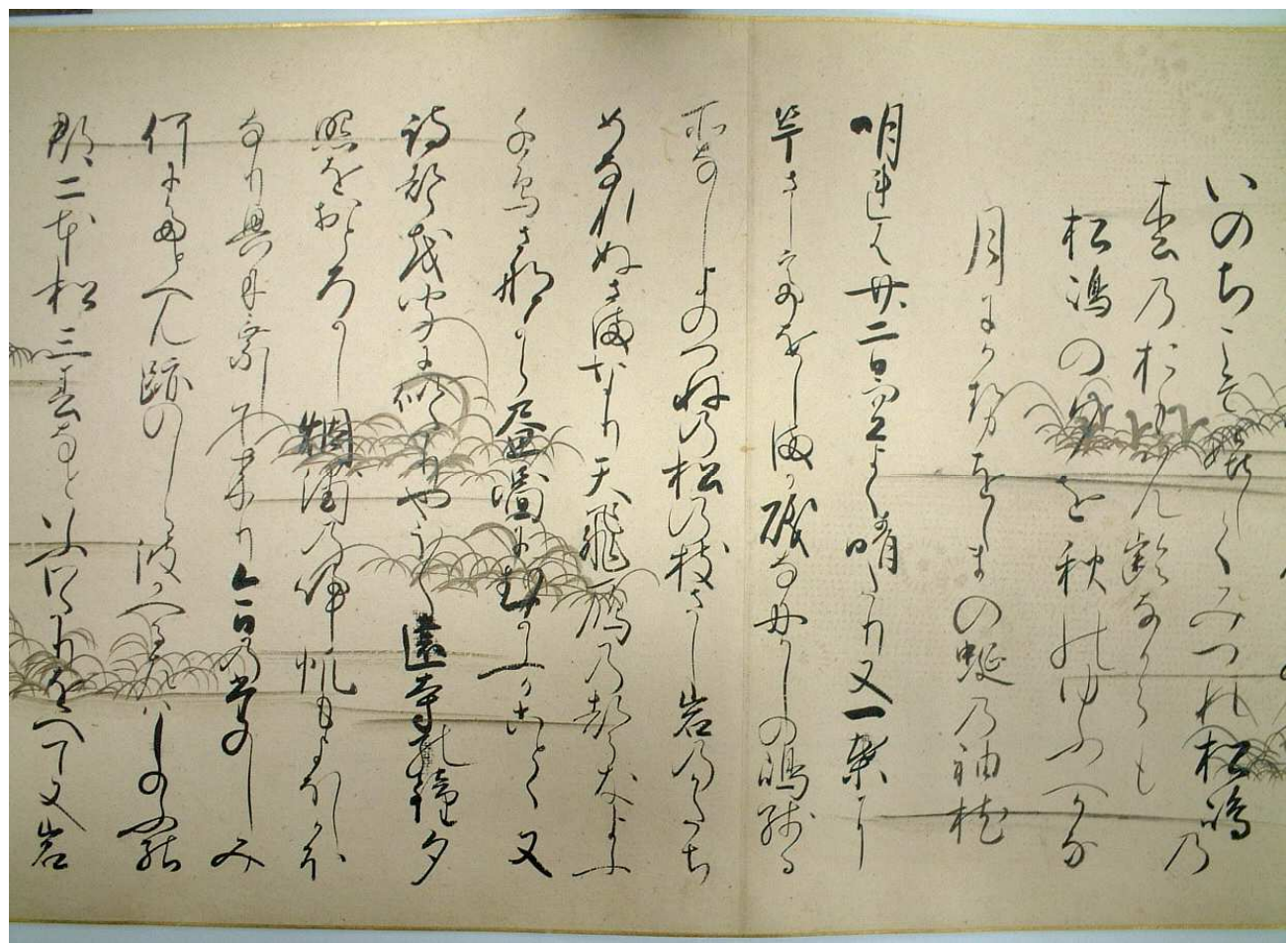
塩竈や色ある のうす烟

嶋かくすそれしも の籬哉

さて 松嶋のたゞすまひ やうかはり めづらか

にいたり ふかきくまぐま見所おほし その

夜はあまの筈やにやどる



いのちこそ嬉しくみつれ松嶋の

松のおもはん ながらも

松嶋の夕を秋のゆふべかな

月にかせをじまの蚕の袖枕

明れば廿二日 空よく晴たり 又 一葉に

竿さして をじまが磯 なにがしの嶋 残る

所なし よのつねの松の枝さし 岩のかたち

めなれぬさまなり 天 の聲 なよぶ

千 さながら畫圖にむかふがごとく 又

詩聲を聞に似たり やうやう遠寺の鐘 夕

照をおどろかし 烟浦の帰帆もよほしがほ

なり 興に乗じて来り 今日のたのしみ

何にたとへん 跡のしら波かへるさは しのぶの

郡 一本松 三春などいふわたりをへて 又岩

城にかへり入ぬ 爰に 又 日比ありて 長月の末

千々の秋よしやわかれば命哉

晨明のつれなやた たひとり旅

このたびは白川の関にかゝりて

遠く聞秋 分る関路かな

下野國あし野といふ所に 西行法師の

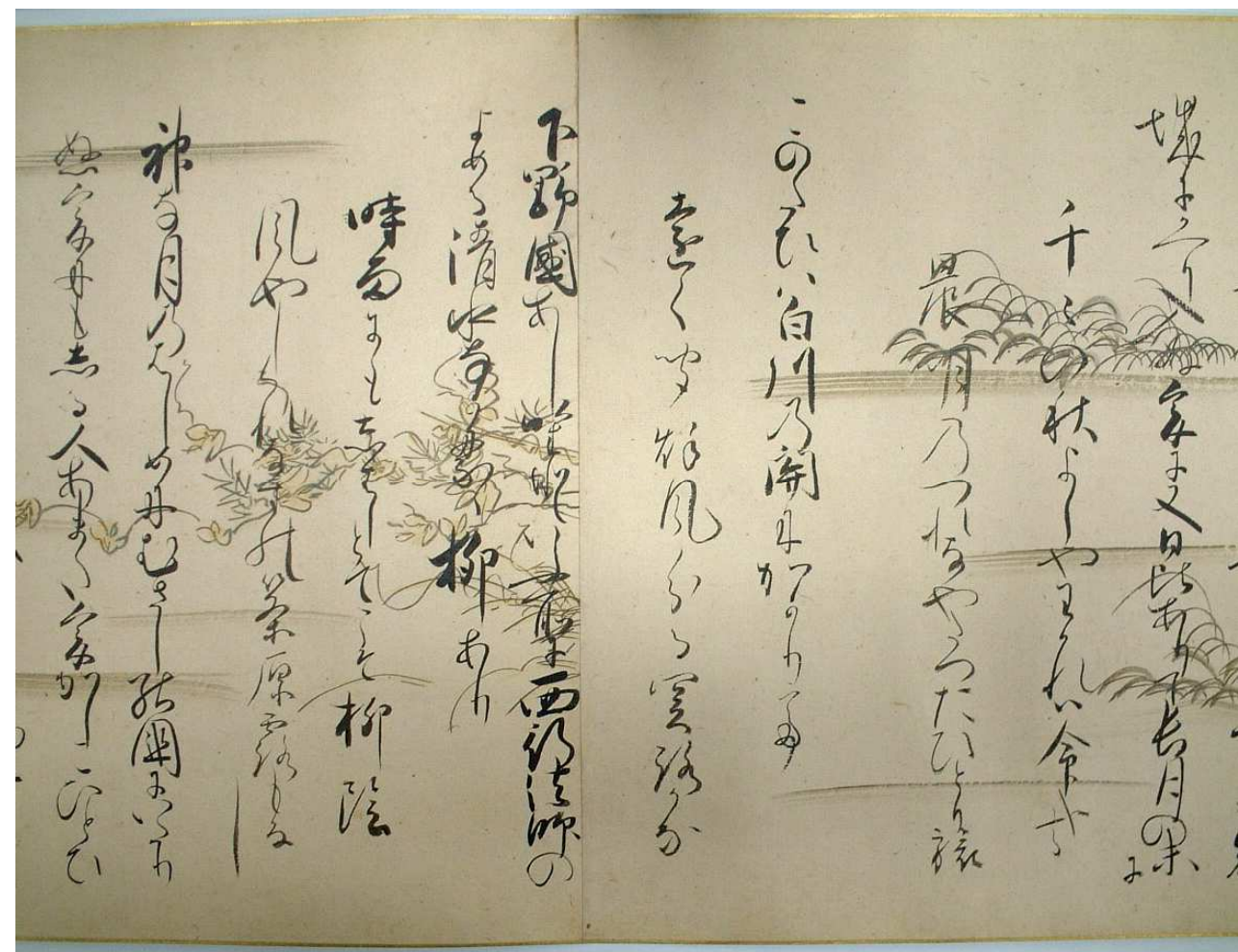
よめる清水ながるゝ柳あり

時雨にもしばしとてこそ柳陰

やしぐれなすの篠原 もなし

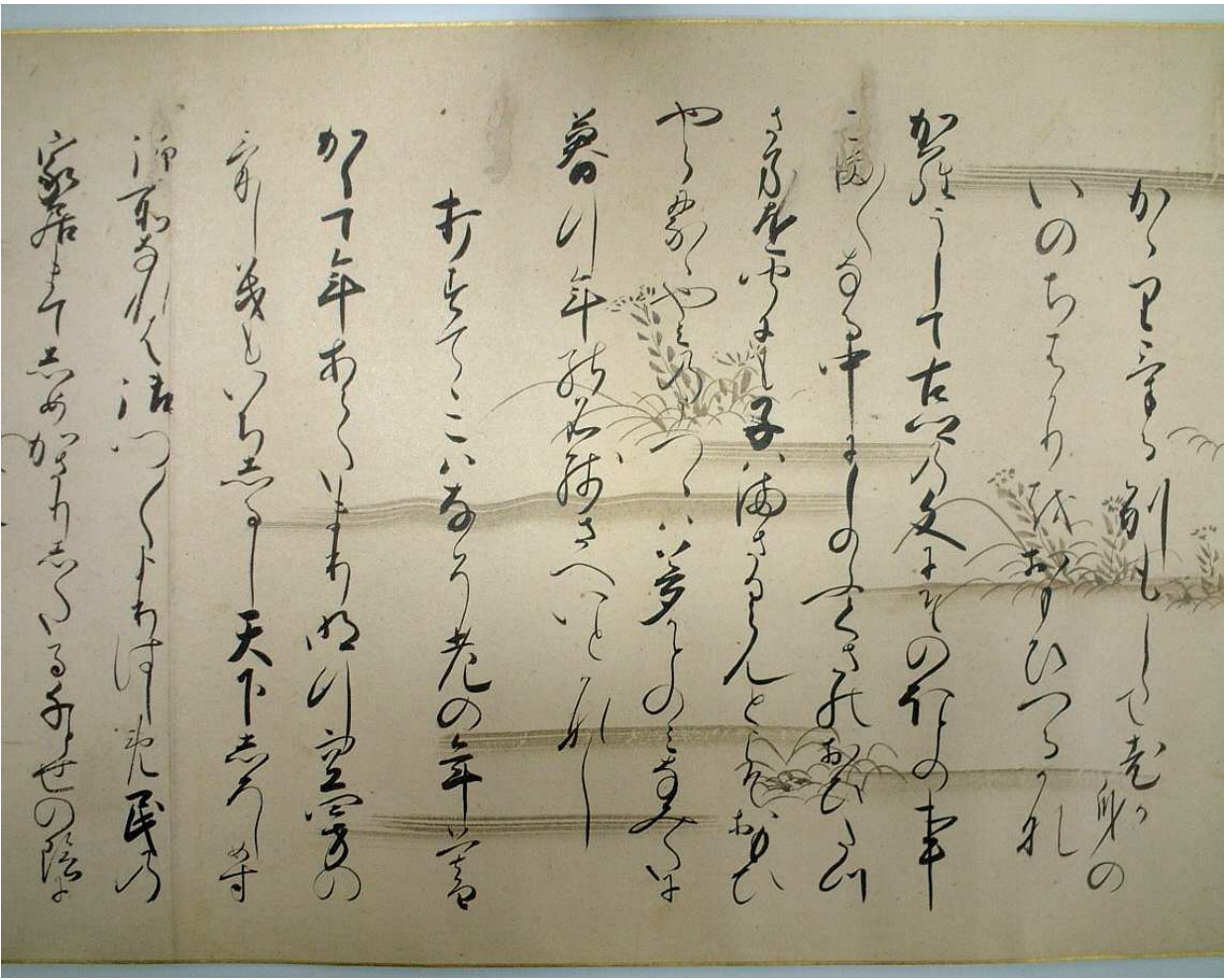
神な月のはじめに むさしの國にいたり

ぬ 爰にもしる人あまた 爰かしこ ひとひ



二日と過行に 雪 がちなる空には
 老の出たちもいかにぞや 春待つてなど
 いふにとどめられて しはすの空にもなりぬ
 京の人きあひて 物がたりのついでに やつがれが
 むすめ 文月の比 うせにけるとぶらひを
 きくに ともかくもおもひわかず 今まで
 告ざりし古郷人もおぼつかなく 夢
 にやあらん 偽にもやと よろづおもひす
 がたなし
 聲をだにきかぬを聞き人傳は
 さながら夢のわかれ也けり
 いにし春 老のわかれこそ 心ぼそうおもひし
 かくさかさまなる愁にしつむ かへすかへす
 つれなきいのちにこそ

二日と過行に 雪 がちなる空には
 老の出たちもいかにぞや 春待つてなど
 いふにとどめられて しはすの空にもなりぬ
 京の人きあひて 物がたりのついでに やつがれが
 むすめ 文月の比 うせにけるとぶらひを
 きくに ともかくもおもひわかず 今まで
 告ざりし古郷人もおぼつかなく 夢
 にやあらん 偽にもやと よろづおもひす
 がたなし
 聲をだにきかぬを聞き人傳は
 さながら夢のわかれ也けり
 いにし春 老のわかれこそ 心ぼそうおもひし
 かくさかさまなる愁にしつむ かへすかへす
 つれなきいのちにこそ



かゝりける別わかもしら知で老おいが身みの

いのち命ばかりをお思もひつるかな

からうじて古郷ふるさとの文ふみに そのほどの事

こま細ごま々なる中に し徳のぶく草さのお生ひた立つ

さま様を聞きにも 子こはま優さるらんとこそお思もひ

やらるゝやみ闇のう現つゝは夢かとのみ なみ涙だに

暮行年くれゆくとしの名残なごりさへいとかな悲し

打捨すてゝこはなぞ老おいの年暮としのくれ

かくて 年改あらたまり 明行空あけゆくそら 四方よもの

けし景きもい著ちじるし 天下あめがしたしろしめす

御所おんところなれば 御門ごもん御門ごもんよりはじめ 民たみの

家居いえまで しめ注かざり連したる千とせ歳の陰かげに

さし出いべきならねど世せをいはひひ身をこと
きりきりなれば

清代せいだいの春はる四方しやうほうの本もとたつ東あづま哉かな

むさし野のや今日けふは霞かすみもなびく世よの

行末ゆくすえとをとき春はるはきにけり

世中よちゆうのどやかに はなやなかなる月日げつじつにそへ

ても ころのやみははるはるかたなし 旅りの

空そらにしあれば 一僧いちそうを供くわする事こと

もなく たゞみづみづから念珠ねんじゆのついでついでにつづ

り出いる句く 百ひゃくの数かずにおよぶ ねがはくは あさ

はかなる言種ことだねながら 唱となふる御名おんなの

ちからにひかれて 五障ごしやうの罪つみをかるめ

九品くほんの花はなひらくる種ねともなれかして

なん 佛前ぶつぜんにさまげ奉たてまつるものならし

宗因

さし出いべきならねど世せをいはひひ身をこと

だつ日ひなれば

御代みよの春はる四方しやうほうの本もとたつ東あづま哉かな

むさし野のや今日けふは霞かすみもなびく世よの

行末ゆくすえとをとき春はるはきにけり

世中よちゆうのどやかに はなやなかなる月日げつじつにそへ

ても ころのやみははるはるかたなし 旅りの

空そらにしあれば 一僧いちそうを供くわする事こと

もなく たゞみづみづから念珠ねんじゆのついでついでにつづ

り出いる句く 百ひゃくの数かずにおよぶ ねがはくは あさ

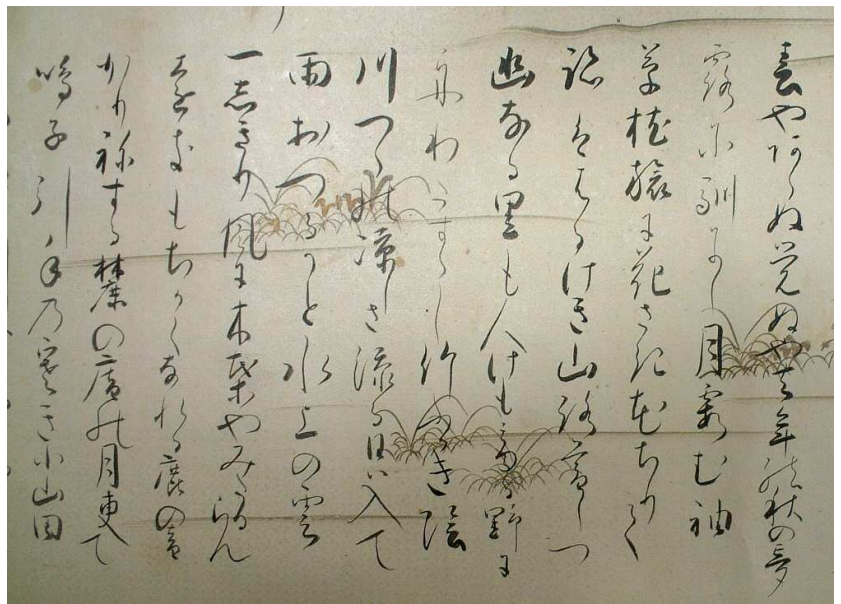
はかなる言種ことだねながら 唱となふる御名おんなの

ちからにひかれて 五障ごしやうの罪つみをかるめ

九品くほんの花はなひらくる種ねともなれかして

なん 佛前ぶつぜんにさまげ奉たてまつるものならし

宗因



春やあらぬ覚ぬや去年の秋の夢

ににし月霞む袖

草枕旅に花さき花ちりて

跡ははるけき山路暮しつ

幽なる里も人けもみゆる野に

舟わたすらし竹ふかき陰

川づらの涼しき添る日は入て

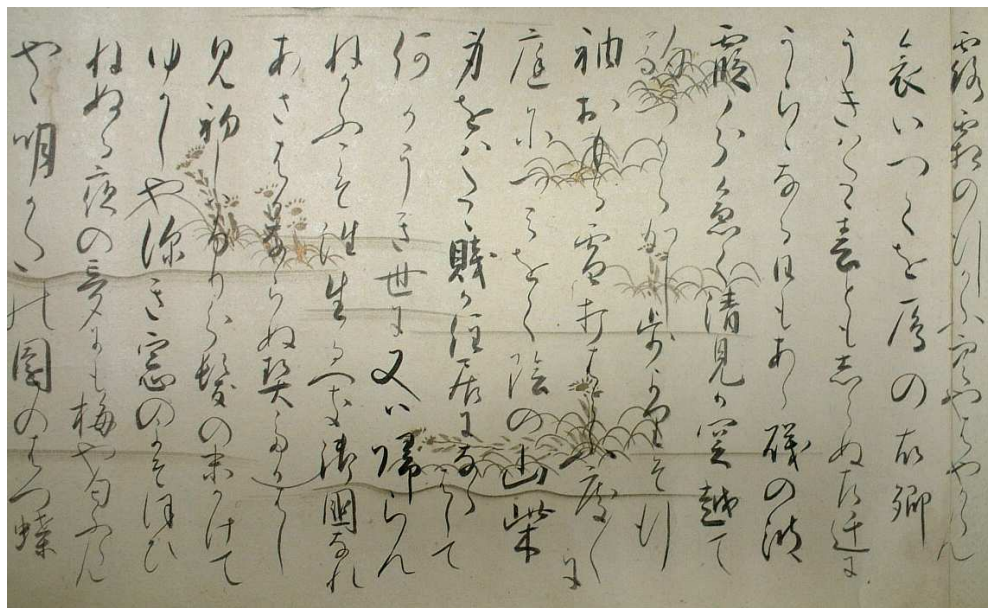
雨おつるかとお上の雲

一しきりに木葉やみだるらん

遠きもちかくなれるの

かりねするの庵の月更て

子引手の寒き小山田



つゆしも 霜の行かふ空やはやからん

衾いづくをの古郷

うきはたぐ春ともしらぬ左遷に

うらなる日もあら磯の波

霞分急ぐ清見が関越て

袖おもる雪打はらふ度々に

庭につみをく陰の山柴

身をばたぐ賤が住居にならして

何かうき世に又は帰らん

ねがふこそ往生るべき

御國なれ

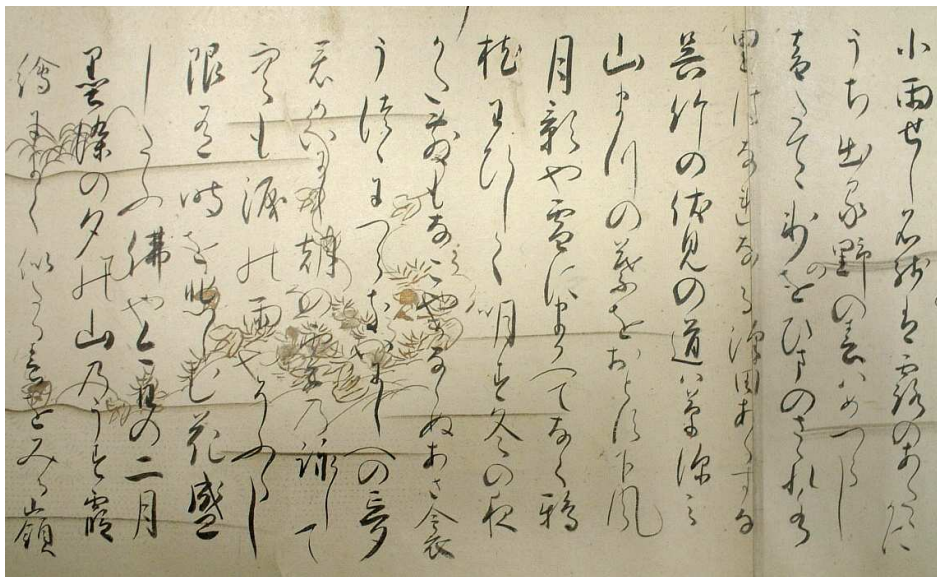
あさはかならぬ契たがはじ

見初しはふり分の未かけて

ゆかしや深き窓のよそほひ

ねぬる夜の夢にも梅や匂ふらん

やゝ明がたの園にはつ蝶



小雨せし名残はなごりのあた暖かにかに
うち出いる野の春はあめづらし

たて氷このをひまのさざれ水

里さとはなれなる澤田荒あらずな

呉竹くれたけの伏見ふしみの道は草深み

山松まつ落の葉をおとす下

月影つづや雪ゆきにまがあへてなく

枕まくらわびしく明あす冬ふゆの夜

かた敷かたしきもなごやかならぬあさあさ

うあつあつあにつらあきあいにしへの夢

君きみがいにし朝あの雲うの詠うたして

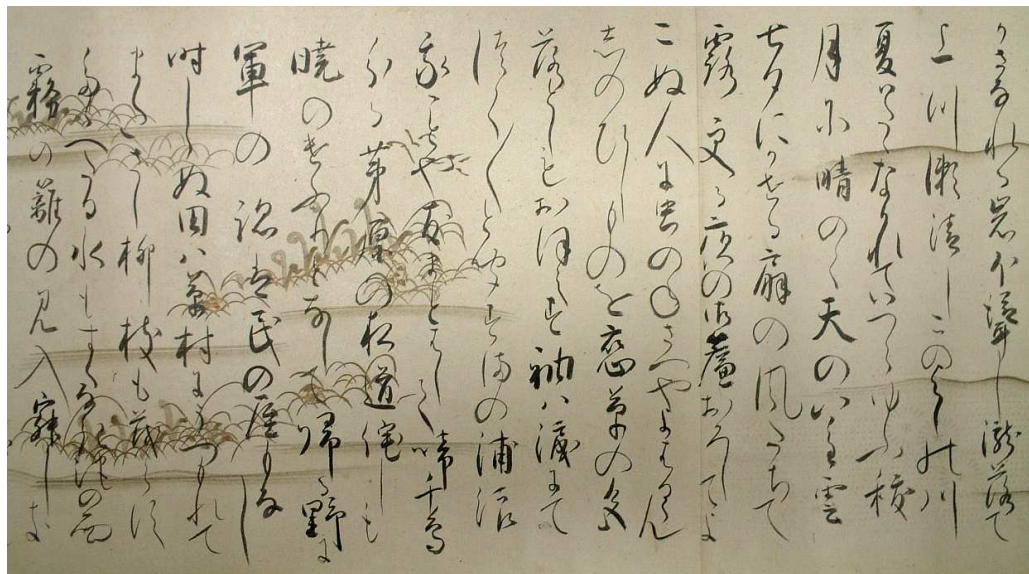
空そらも涙なみだの雨あめやそそふらし

限かぎ有時あを悲かなしむ花盛はな

したふ佛ほとけや今日けふの二月ふたつき

墨染すみぞめの夕ゆふの山やまは霞かすみ

繪えによく似にたる松まつをみる嶺みね



かさなれる岩いわほ聳おそし瀧たき落おて

上かみつ瀬清せしこのよしの川がわ

夏なつはたどながれていづらゆふは祓はら

月つきに晴はれ退ひる天あまの八重雲やえぐも

七なな夕はたにかせる扇あふぎのたちて

更ふける夜よの御簾みすおろしてよ

こぬ人こに虫むしのねさへやよはるらん

しのびしものを恋草こいぐさの色いろ

落おつしもおほえず袖そでは涙なみだにて

つづくと聞きすまの浦波うらなみ

我わがことや友ともまどはして啼なく千ち

分わかる茅原ちはらの夜道よみち侘わびしも

暁あかつきのけぶりとなして帰かへる野のに

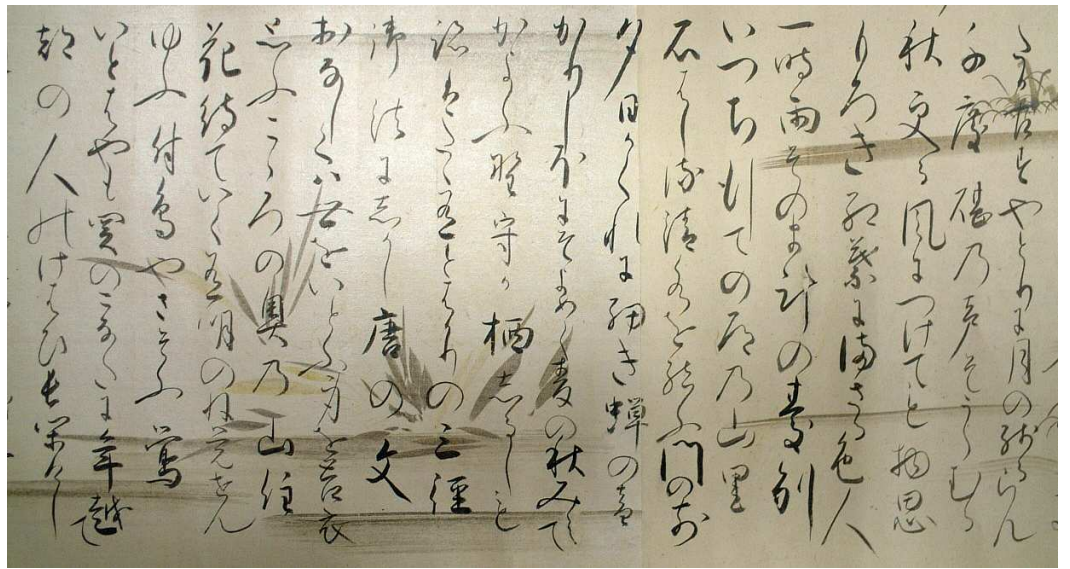
軍いんぎの跡あとは民たみの屋やもなし

時ときしらぬ田たは草村くさむらにうづもれて

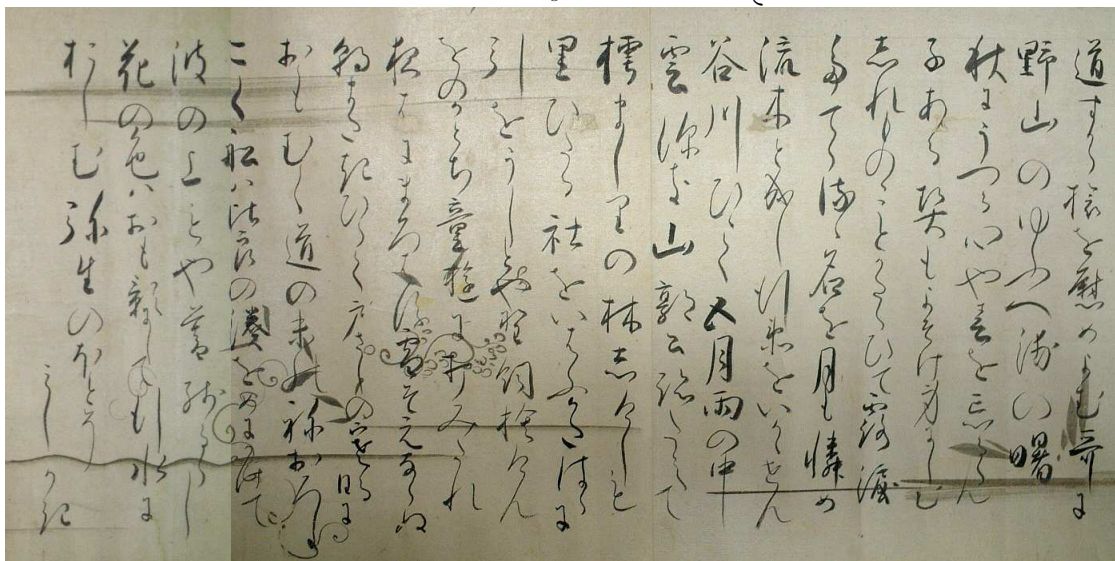
まださし柳枝やなぎえも茂さからず

たへたる水みづもすくなき池いけの

の籬まがきの見入みい寂さびしき



誰たがふるる巢宿 ながすやどりに月の残るらん
 千度せんど礎きぬたの聲こゑぞうらむる
 秋あき更まるにつけても物思ものおもひ
 もろき紅葉もみぢにまざる色人いろびと
 一時ひとしぐれ雨あめそのま計間ばかりの憂うき別わかれ
 いづち行いての道みちの山里やま里り
 石いばしる清水しみずを結むすぶ門かどの前まへ
 夕日ゆふひがくれに細こき蟬せみのこゝろ
 かりしほにそよめく見の秋あきみえて
 通とほかよふ野守のりもりが栖すむしるしも
 跡あとはたゞ有あるとばかりの三みつ経のきやう
 御法みほりにしかじ唐からの文ふみ
 おなじくは世よをいとお身をみをこげくも
 同どう思おもふころの奥おくの山住やますま
 行い花はな待まちていく有明ありあけの寝ざめね覚させん
 木綿きわた付つけりやさそふうけいす
 早はやいとはやも関せきのこなたに年とし越こえて
 都みやこの人ひとのけはい長なが閑かんけし



道みちすがら旅たびを慰なぐさめよむ哥うたに
 野山のやまのゆうべ浦うらの曙あけぼの
 秋あきにうつる心こゝろや春はるを忘わするらん
 子こある契ちぎりもよそげ身みにしむ沁
 痴痴しれものことかたらひて涙
 立たたてらるる名なを月つきも憐あわれめ
 流木ながれぎと成なりし行衛ゆくえをいかゞせん
 谷川やがわひゞく五月雨さみだれの中なか
 雲深やまほしき山郭やまがく公跡こうせきたえて
 樗おうちまじりの林はやししげしも
 里さとびたる社やしろをいはふかたはらに
 引ひをうしとや野の捨がいけん
 をのがどち童遊わらわあそびに打うちみだれ
 夜よはにまるばす雪ゆきそえならぬ
 朝あまだきひらく戸かどさしのさゆる日に
 朝あもむく道みちの末すえのねおろし
 こぐ船ふねは比良ひらの湊みなとをめにかけて
 波なみの上うへもや暮くれ残のこるらし
 花はなの色いろはおも影かげにして行水ゆくみづに
 おしむ弥生やよいのほどぞみじかき

現代語訳

『奥州紀行（奥州塩竈記・陸奥塩竈一見記

・松島一見記・陸奥行脚記）』

西山宗因 寛文三（一六六三）年春成立

ここに一人の翁（＝私、西山宗因）がいる。身分は卑しく、

多くの人たちとのつきあひもない。僧侶の姿をしているが、

寺にいるわけではない。仏の教えを信じてはいるが、

あくせくと俗世を生きる愚か者である。風雅や文学の道を

愛し、同好の者たちだけを友としている。あちらこちらに

足を運び、歌や句を作り、世の移りというものを楽しんでゐる。奥州の地に

心を惹かれ、旅をしたいと思つたのは、昨年三月の初めのことだつた。

その後、私は永住の地を求めるわけでもなく、

また、他人に招かれることもなく、ただ浮き草のように、ふらふらと

暮らしていた。そうこうしているうちに、春が過ぎ、秋が来た。

その頃になって、ようやく決意し、旅に立ち、七月二十日過ぎ、

勿来の関を越え、ある方（＝内藤忠興）の城下（＝磐城平城下）に

着いた。

この城の北や西は皆、山であつた。それらの山々は険しくはなく、

木々が繁茂し、青々としていた。城の南には川があつた。

その川は日夜、東に流れ、海に注ぎ、遠くの地を

行き交う船が繋がれていた。何とも、伸びやかな風景であつた。

勿来の関、三箱の御湯、野田の玉川、緒絶の橋、

小川の橋、岩城山といった奥州各地の名高い歌枕の地が、城の外、

一、二里のところには配置されていた。いずれも趣き深いものだつた。

玉川（＝藤原川）のほとりに城主の別荘があつた。別荘の東の垣根には

菊が美しく咲き、南の山は紅葉が真っ盛りだつた。

茸狩りや川遊びを楽しむこともでき、風情豊かな

ものとなつていた。

世を尽くす我が所貸せ下紅葉

海に面したところには、茅葺きの休み所があつた。大きな川が

垣根のすぐ外を流れ、潮が満ちると、海水が門の外までうち寄せる。

ここで、私は中国の隠遁者、子陵のような日々を過ごした。

まさに仙人になつたようだつた。いつまでも

ここにいたいと思つた。八月十六日頃、

「ここから近いわけではないが、遠く、京都の地から

訪れる人もいるのだから」といわれ、同行を

してもらい、道々、歌や句を作りながら、松島に旅することになった。

相馬の中村を過ぎ、名取川や

広瀬川を渡り、秋の盛りの素晴らしい季節に宮城が原に着いた。

宮城野を都の嵯峨は花もなし

磐城平を出発して六日目だつたらうか、朝霧が立ち込める時刻に

松島に着いた。聞いていた通り、松島の風景は日本で、言葉ではない
表せないものだ。河原左大臣（源融）の逸話が思い出され、
河原左大臣も、ここを訪れ、眺めたのではないかと思われる海人の
小舟に乗り、霧が垣根のように立ち込めるなか、島々を隈なく
巡った。

浦山は何処はあれど蟹小舟

かかる所の秋の夕暮れ

塩竈や色ある霧の薄烟

嶋隠すそれしも霧の籬哉

松島の風情は他とは違い、唯一無二のもので、

奥深く、見どころが多い。その

夜は海人の小屋に泊まった。

命こそ嬉しく見つれ松嶋の

松の思はん齢ながらも

松嶋の夕べを秋の夕べかな

月に貸せ雄島の蟹の袖枕

翌八月二十二日は晴天だった。小舟に

竿して、雄島が磯など、島々をあますところなく

巡った。松の枝ぶりや岩の形は、他にはない、

独特なものであった。空を飛ぶ雁の鳴き声、友を呼ぶ

千鳥のさまは、一幅の絵を見ているようであり、また、

詩の世界のようであった。しばらくして、遠くの寺の鐘の音が
夕刻を告げ、浦々の家から昇る煙が「帰れよ」といつているよう
だった。何とも趣き深く、人生で最高の一日となった。

その後、松島を離れ、帰路に着いた。信夫郡、

二本松、三春などというところを経て、

磐城平に戻った。ここで数日を過ごし、九月の末、磐城平を旅立った。

千々の秋よしや別れは命哉

晨明のつれなやたった一人旅

そして、白河の関を越えた。

遠く聞秋風分る関路かな

下野国の芦野に、西行法師が

「清水流るる柳かな」という歌を詠んだ柳がある。

時雨にもしばしとてこそ柳陰

風や時雨那須の篠原露もなし

十月の初め、武蔵国に着いた。

多くの知人がおり、一日、

二日と過ごすうちに、雪や霰が降る季節になった。

「年齢を考え、大坂に戻るのは春になってからの方がいい」と

引き留められ、十二月になった。

京都から来た人に会い、話をした時、私の

娘が七月頃に他界したことへの悔みの言葉をかけられた。

何のことなのか 全くわからなかつた それにしても このことを

知っているはずの人たちが知らせてくれなかつたことが不可解だ 夢を

見ているのだろうか 嘘だろうと さまさまに考え

自分自身を見失つてしまつた

声をだに聞かぬを聞き人伝は

さながら夢の別れ也けり

昨年こぞの春、大坂を旅立つた際、もう会えないのではと心細く思ったが、

老いた私ではなく、娘が先に亡くなるとは、返す返すも、

命のはかなさというものを痛感させられる。

かかりける別も知らずで老が身の

命ばかりを思ひつるかな

ようやく大坂から手紙が届いた。それには娘が亡くなった時のことが

詳しく書かれていた。娘の遺児が育っていることも、その手紙で

知り、その子のことが愛しく思われた。

しかし、それにつけても、これは闇のなかの夢なのではないかと、涙に

むせぶなか、その年が悲しくも暮れていった。

打ち捨ててこはなぞ老の年暮

新年を迎えた。元日の朝、あたりの

風景があらたまつた。天下を治める將軍の

お膝元の江戸では、江戸城の門をはじめ、人々の

家にも注連飾りが飾られ、末代までの繁栄を

祈る特別な日となつていた。

御代の春四方の本立つ東哉

武蔵野や今日は霞もなびく世の

行末遠き春は来にけり

世の中がのどかで、華やかであればあるほど、

私の心の闇は、なお一層、深いものとなり、晴れることがない。

旅の身であるので、僧侶に娘の供養を頼むことも

できず、自ら数珠を繰り、娘の冥福を祈つた。その時、

百句の句を作つた。これらの句は、単なる

言葉に過ぎないが、仏の名を唱えれば、仏の

力によって、娘の五障の罪が減じられ、

極楽浄土への成仏がかなうはずだとの思いから、

仏に捧げるものである。

宗因

主要な句の解釈

●世を尽くす我が所貸せ下紅葉ところ
したもみじ

私は死ぬまで、ここで暮らしたいと思っている。紅葉の枝の下で結構なので、そこを私の棲家として、貸してはもらえないだろうか。

●宮城野を都の嵯峨は花もなしみやぎのみやこの
さが

宮城野は、その美しさから、京都の嵯峨野と並び称される。しかし、宮城野には、嵯峨野のような桜の花は咲いていない。あつ、それはそうだな、今、季節は秋なのだから。

●松嶋の夕を秋のゆふべかなまつしほ
ゆうべ

私が今、見ている松島の夕暮れの風景こそが、まさに、秋の夕暮れの風景である。

●時雨にもしばしとてこそ柳陰しぐれ

平安時代の歌人、西行は芦野の柳を「道の辺の清水流るゝ柳陰しばしとてこそ立ち止まりけれ」と歌に詠んだ。この歌に詠われているのは、暑い季節、柳の木陰でひと休みする人の姿だが、私は、秋の終わりに、ここで時雨に見舞われ、柳の木の下で、しばし雨宿りをしている。

●春やあらぬ覚ぬや去年の秋の夢はる
あらかぬおぼぬやこぞのあきのゆめ

春を迎えたというのに、私はまだ去年の秋に見た娘が亡くなった夢から覚めずにいる。

>>> 関 連 資 料 <<<

- ◆『江戸時代のいわき』 　　いわき市立美術館 編　いわき市立美術館　1997　(AL/708/エ)
- ◆『華麗なる西山宗因』 　　八代市立博物館未来の森ミュージアム　2010　(069.9/カ)
- ◆『近世文学資料類従　古俳諧編 28』　近世文学書誌研究会 編　勉誠社　1976　(R/918.5/キヅ-28)
- ◆『櫻川』　　(活字本) 　　大東急記念文庫　1960　(AL/911.3/サ)
- ◆『櫻川　上巻』(印影本) 　　大東急記念文庫　1985　(K/911.3/サ-1)
- ◆『櫻川　下巻』(印影本) 　　大東急記念文庫　1985　(K/911.3/サ-2)
- ◆『宗因から芭蕉へ』　柿衛文庫・八代市立博物館未来の森ミュージアム・日本書道美術館 編
八木書店　2005　(AL/911.3/ニシ)
- ◆『宗因先生こんにちは　上』　　深沢真二・深沢了子 著　和泉書院　2019　(911.3/ニシ-1)
- ◆『東北・北海道俳諧史の研究』　　井上隆明 著　新典社　2003　(911.3/イ)
- ◆『内藤風虎露沾俳諧展』　内藤風虎・露沾俳諧展実行委員会 編　いわき地域学会
1996　(AL/911.3/ナ)
- ◆『内藤露沾』　　雫石太郎・矢部楯郎 編　1944　(K/911.3/ナ)
- ◆『八代城主・加藤正方の遺産』　八代市立博物館未来の森ミュージアム 編
八代市立博物館未来の森ミュージアム　2012　(219.4/ヤ)
- ◆『西山宗因全集　第1巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2004　(918.5/ニシ-1)
- ◆『西山宗因全集　第2巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2007　(918.5/ニシ-2)
- ◆『西山宗因全集　第3巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2004　(918.5/ニシ-3)
- ◆『西山宗因全集　第4巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2006　(918.5/ニシ-4)
- ◆『西山宗因全集　第5巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2013　(918.5/ニシ-5)
- ◆『西山宗因全集　第6巻』　　西山宗因全集編集委員会 編　八木書店　2017　(918.5/ニシ-6)

企画展「西山宗因『奥州紀行』展」



- 会期　2019年6月22日(土)－10月27日(日)
- 会場　いわき総合図書館 5階 企画展示コーナー

- 令和元(2019)年6月22日 発行

- 編集・発行　いわき市立いわき総合図書館